

「小さな親切」運動鹿児島県本部賞

一 声

鹿児島県立鶴丸高等学校 三年 儀崎 雅子

朝、通勤・通学ラッシュの時間帯、J Rの中は人でいっぱいです。鹿児島中央駅に近づくにつれ、一駅ごとに人は増えていきます。

ある朝のことでした。中央駅の二つ前の駅、車掌さんが笛を鳴らしてドアを閉めようとしても、人が列車に入りきららず、ドアが閉められません。私や友人はなるべく奥へ奥へとつめていきますが、なかなか人山は動きません。私と友人がいた場所はいいたわけですから、そこへ人がつめればもう少し人が入れるだろうかと、じりじりした思いでまた少し、かばんを奥へずらしました。そのときです。

「すみません、もつと中につめてもらえませんか。」

糸がはったような、若い女性の声が響きました。私は思わずハッとして、声の方向を見ました。その声をきっかけに人々は目がさめたように動き出し、やがてド

Aが閉まりました。発車します。

私は発車してから、鼓動が少しはよいことに気がつきました。体調が悪いわけではありません。他でもない、恥ずかしさからでした。私は奥につめているのだから、あとは他の人の責任だと、どこか我関せずといった意識でその場に立っていました。動かない人々と、私とを区別して考え、腹を立てるばかりでした。

しかし、彼女の一声に気づかされたのです。「動かなかった」という点において、私は彼らと何ら変わらなかつたと。彼女は間違いなく「動いた」、行動した。けれども私は「動かなかった」心のどこかで、自分は乗れているからと安心する気持ちがあり、乗れていない人のことをきちんと考えてはいなかつたのだろうと気がつきました。声をあげたとき、彼女は乗っていました。乗れていたのに、乗れない人のために声をあげたのです。その

ことを思うにつけ、自分の無神経さに腹立たしさはつのるばかりです。

できることはやったと満足して、本当は周りの人のためにできることはもつとあつたのに気がついていなかつた。気がつこうともしなかつた。満足してしまつた私と、満足しなかつた彼女と。その差は思いやりの差であつたと思うのです。

朝のあの気だるげな、どっちつかずのどこか冷たい空気。よどんで停滞した池のようなあの空気を、清澄で軽快な溪流に変貌させたのは、他でもなく、堰を壊す小石のような彼女の一声でした。

そして、彼女の投じたその一石は、私の心に、波紋をおこし、それまで見えていなかつた私の無神経さを改めて問うたのです。彼女のその一声は車掌の笛よりはつきりと、アナウンスよりもまっすぐに、私たちの心に響き、今も私の耳に残ります。

たつた一声。でもそのたつた一声で救われた人はたくさんいます。乗れずに往生していた人々はもちろんのこと、ドアを閉めて発車させることのできた車掌さん、運転手さん。そして、時間がおして列車の到着が遅れた場合、困ってしまっ

忙しい人。

逆に言うと、それだけ困る人がいたのに、「動いた」のは彼女だけだつた。彼女が「困る人」であつたのかどうかはわかりません。ただ私は、「困る人」が「動く」べきであつたとは思わない。「困る人」もそうでない人も、「困る人」を思いやり、「動く」ことはできた。そうすべきだつたと思うのです。おそらくこれから先もあまり「困る人」にはならない私、それでも「動ける人」でありたい。そう思わせてくれたあの朝の彼女の一声に感謝し、その大きな勇気と思いやりを称賛して、「動ける人」、一声をあげられる人であらうとすることを約束します。

【審査評】

満員の列車で乗客が悶々としている中、ある乗客の発した「つめてもらえませんか」の凛とした一声に筆者ははっとします。車内の空気を一新しただけでなく、筆者の心を大きく動かしたその声。大きな勇気と思いをやり与えてくれたことに筆者は感謝を綴っていますが、その「気付き」こそが筆者のもつ細やかな感性と他者への思いやりがもたらしたものであり、筆者の優しさが導いたものではないでしょうか。